

「体育大好きふぞくっ子」が育つ授業

～一斉形式からワークショップ形式への学習過程によって～

渡辺 圭

運動に親しむ資質や能力を育てるためには「毎回の体育の授業が楽しみ」と感じる子どもを育てなければならない。本稿は「体づくり運動・多様な動きを作る運動遊び」の領域において、運動のおもしろさを自分のものにしていく学習過程を重視した実践を行い、考察および成果と課題を検討したものである。

単元の構成としては、前半に運動のおもしろさを全員が感じられるような「一斉学習」の形態をとり、後半で個々の運動への思いが実現できるような「ワークショップ」の学習形態に進めた。また扱う運動は「力試しの運動遊び」と「体を移動する運動遊び」である。

キーワード：体づくり運動 多様な動きをつくる運動遊び、ワークショップ、力試しの運動

1. 研究目的

全ての子どもが「体育の時間を大好きになる」単元及び授業の進め方、展開の工夫を探る。

1. 1. 体育科でめざす子ども像

体育の時間を好きになる要因としては、体を動かして気持ちよかったこと、できなかったことができるようになったこと、わからないことがわかったこと、友だちと一緒に運動を楽しんだことなどが考えられる。そこから、本校体育部では体育科でめざす子ども像として以下の4点をあげている。

- 1：体を動かすことが好きな子
- 2：運動が上手にできる子（やった、できた！）
- 3：運動の構造的特性について考える子
（あっそうか、わかった！）
- 4：仲間と力と心を合わせて運動を楽しむ子

1. 2. めざす子ども像に迫る体育科の学び

本校体育部では、めざす子ども像に迫る「体育科の学び」を、運動の取り組みを通して、その運動のもっているおもしろさを味わったり、さらなるおもしろさを友だちと共に探求したりしていく営みそのものとしている。

そうした営み（学び）はもちろん子ども主体で行われなければならないが、一方で教師の丁寧なみとりと適切な支援も欠かせないものである。子どもが運動の何におもしろさを感じているのか、どんな技をしたいと思っていのかななどを、一人一人丁寧にみとり、思いを実現する場や器具の準備、声かけなどの支援をしていくことで、学びを進めていく。

1. 3. 多様な動きをつくる運動遊びについて

「多様な動きをつくる運動遊び」の目標として、基

本となる体の動きを身に付けることと、運動のもつ楽しさを味わうことの2点がある。教師は授業において、意図的、計画的にこの2点の内容を身に付けさせることが重要であるが、同時に、子どもたちが興味・関心をもって運動を行ったり、その行い方を工夫したりできるよう学習を展開していく必要がある。

そこで、4月、5月の段階で「体ほぐしの運動」と「多様な動きをつくる運動遊び」に取り組んだ。「体ほぐしの運動」では、運動に対し意欲的になれない子どもを考慮して、みんなで運動を楽しみ、気づきを交流できるようグループでの運動と振り返りを大切にしたりした。また「多様な動きをつくる運動遊び」では、以下の「運動がおもしろくなる4つの工夫（表1）」を示し、学び方を伝えた。意欲をもって取り組めるように子どもの自由な発想を紹介、賞賛しながら授業を進めた。

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none">①「動き」を工夫してみよう②「人数」を工夫してみよう③「道具や場所」を工夫してみよう④できないことに「挑戦」しよう。 |
|---|

表1 運動がおもしろくなる4つの工夫

その結果、ぞうきんを使って相手を引っ張る動きだけでも、20を超える運動を考え出していた。

2. 研究方法

鈴木らによれば「体づくり運動」の領域においてワークショップの形式をとることで、子どもの自由な発想が保障され、アイデアが実現可能になる、としている。

5月に行った授業実践では、器具の数が限られた場では、子どもたちが活動の中から生じたアイデアを、十分に実現させることができなかったこと、こちらの意図する動き、感じてほしい「おもしろさ」から離れてしまったことがあった。そこで11月の授業では、この点を改善する単元構想としてワークショップ形式の授

業に取り組むことにした。また5月の実践の反省から学級の全員が取り組む運動の「おもしろさ」を共有できるようにするため、単元の前半を「一斉学習」の形式で行った。そして、後半を「ワークショップ」形式で行った。「ワークショップ」は生活科で経験済みであり、こうした学習過程の構想によって、子どもが自ら運動のおもしろさに迫り、獲得することができると仮定し検証した。

3. 授業の実際

4月から11月にかけて取り組んだ「体づくり運動」の「体ほぐしの運動」と「多様な動きをつくる運動遊び」の実践についてである。

3. 1. 体ほぐしの運動での授業開き

体育の授業開きに「体ほぐし運動」を行った。これは体力や経験の差があっても、運動を共に楽しむことができるからである。「体育の授業を大好きにする」第一歩であるから「全員が楽しめる、全員で楽しめる」ことをねらって運動を選び、活動をした。



図1 目かくしドライブ

取り組んだ主な運動と、授業後のふり返りを紹介する。
①目かくしドライブ(図1)のふり返り「こわかったから、友だちの声をすごくよく聞いた。」

「肩をつかんだら、大きかった。それに温かかった。」「自分たち以外の声もよく聞こえてきた。」

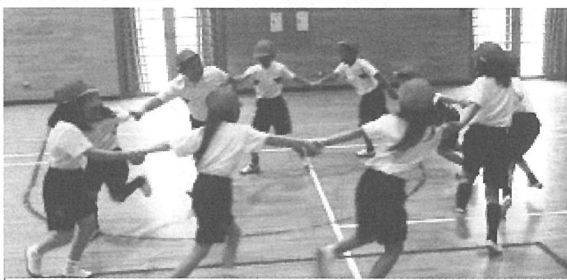


図2 大えんかい

②大えんかい(図2)のふり返り「むずかしくて、転んだけどおもしろかった。」「人数を増やしてやったら、すごく速いような気がしてびっくりした。」「手がめっちゃ痛かった。」「友だちに手を強くにぎられた。自分も強く握ったと思う。」



図3 人間ドミノ

③みんなで肩もみ&人間ドミノ(図3)ふり返り「肩をもまれて、くすぐったかった。」「順番に倒れてきて、どきどきした。」「なんかおもしろくってみんな笑った」「めっちゃ重かった」

学習指導要領には「体ほぐしの運動」の内容について次のように記されている。「ア 体ほぐしの運動では、心と体の変化に気付いたり、体の調子を整えたり、みんなでかかわり合ったりするための手軽な運動や律動的な運動をすること。」¹⁾子どもたちの学習の様子や学習カードのコメントから今回の実践をふり返ると、授業開きにおいて「体ほぐしの運動」は非常に有効であったと思われる。

3. 2. 「4つの工夫で運動をおもしろく！」

多様な動きをつくる運動遊びの実践

5月に行った「多様な動きをつくる運動遊び」では(表1)の4つの工夫を意識させ授業を進めた。

はじめはおもしろさを味わう最小限の道具や器具(ぞうきん1枚、平均台一本)などを用意し、1時間ごとにふり返りで「どうやったらもっとおもしろくなるかな?」と問いかけ、次の時間につなげていった。子どもが運動に対してどんな思いをもっているのかを学習カードのふり返りから「みとり」、思いを実現させる

道具や器具を準備し、声かけの「支援」をした。

ぞうきんを使った、力試しの運動遊び、ぞうきんドライブ(図4)の実践で出てきた工夫は以下のとおりである。(図5、6)

①「動き」の工夫



図4 ぞうきんドライブ



図5 うつぶせの姿勢で

①「動き」の工夫



図6 足をもって

もつ部位、引かれる姿勢など多くの工夫が見られた。

②「人数」の工夫



図7 人数を変えて

引く側、引かれる側どちらも人数を変化させることで、異なる体の使い方を楽しんだり、声のかけ合い方を工夫したりするなど、お互いに協力し合う様子が見られた。(図7)

③「道具や場所」の工夫



図8 二人で引っ張る動き



図9 もち上げる動き

「長いぞうきんがほしい」というふり返りから、バスタオルを用意したところ、引き方だけでなく、もち上げる動きも出てきた。

④できないことへの「挑戦」



図10 何人引っ張れるかな

「何人引っ張れるか」に挑戦している子どもが見られた。ひっぱることができるとお「おー」という歓声が上がった。「次やらせて！」という声がいくつも聞こえ、非常に意欲的な雰囲気が見られた。

この活動によって、子どもたちは「4つの工夫」で楽しさが広がっていくことを実感できた。

3. 3. 一斉形式からワークショップ形式の学習形式へ

11月に行った「多様な動きをつくる運動遊び」の単元では「あそぼう！つくろう！ターザンワールド！」というタイトルで「力試しの運動遊び」「体を移動する遊び」に取り組んだ。

そして単元の前半では、学ばせたい体の動きを全員に体感してもらうために学習形態を「一斉形式」で行った。(図11, 12)



図11 ターザンロープでブランコしよう



図12 バーをくぐりぬけよう

子どもたちは、どの運動場面においてもよい表情で取り組み、体を存分に動かしていた。高田4原則をベ

ースに作成した「ふりかえり」結果からも、それを確認できた。

単元の後半には自分が動きを工夫したい場でお店を開いて、友だちに運動を楽しんでもらう「ワークショップ形式」の学習形態をとった。

器具の置き方や数を増やして場づくりを工夫したり、ルール考え、記録を掲示したりするなど、各場において様々な場の工夫が見られた。図13は映画をヒントにロープにつかまりながらクマのぬいぐるみをとる遊びを考えた場面である。また図14はバーに網をかけ、洞窟に見立てた場づくりをしているところである。さらにくぐり方を台車に乗って進むことにより、動きの変化もさせていた。



図13 クマのぬいぐるみをとる動き



図14 台車を動かして、進むうごき

今回の単元では45分の中ほどに「ふりかえり」を設定し、活動で気づいたことを交流した。それは、子どもに生まれた「気づき」を次の時間まで持ち越すことなく、実現させるためである。これによって場の変化に伴う動きの広がり豊かになり、一人一人の意欲にもつながっていったと考える。

4. 授業の考察

一斉形式においては、取り組む運動の特性を十分に感じながら授業を進めることができた。また「運動がおもしろくなる4つの工夫」についても、子どもたちは理解し、実践に移すことができていた。子ども同士も、多くの声掛けをして係り合い、意欲的に運動ができていた。運動をおもしろくするという運動へのかわり方を学ぶことができた。

その一方、ワークショップ型では、子どもたちの中に多様なアイデアが生まれたものの、人が分散してし

まったために、その場でのおもしろさを十分に味わえなかったのではないかと考える。一斉形式のような盛り上がりの雰囲気を感じるものが少なかったからである。また少人数での活動は、思いを共有しにくく、授業の中での「ふりかえり」についても活発な意見交換とはいかなかった。子どもたちは、自ら考えたワークショップ形式での工夫がどうであったのかについて、十分な意見をもらえず、「おもしろさを生み出す」という体育での学びを実感することができなかつたと感じている。

5. 成果と課題

学習形態が一斉形式からワークショップ形式へと進む学習過程の工夫については、一つの成果があったと感じている。前半に教師が味わってほしい動きのおもしろさや体験してほしい動きに全員が触れることができ、後半の学習でも、学習のねらいから外れることなく、子どもたちの自由な発想を活かして学習を進めていくことができた。

しかし、その一方でワークショップ形式では、場の種類と数をどうするかが、大きな課題になってくると感じた。今回は少人数のグループにして一人一人の思いが実現できるよう場を9つ設けたが、場が多くなりすぎ、動きを十分に味わうことができなかつたと思われる。それはふりかえりでの発言に、子ども同士のつながりが感じられなかつたことやカードのコメントの少なさにも表れていた。

今後の研究として、はじめに提示する動きや場がどういったものであれば、子どもたちがかわり合いの中で動きを広げていけるのかを探っていききたい。「多様な動きをつくる運動遊び」という子どもの自由な発想がより重視される単元であることから、子どもの主体的な学びを導くグループの人数、場の数などをよく考慮して授業を組み立てていく必要を感じた。

細江文利 鈴木直樹 成家篤史(2011)『動きの『感じ』と『気づき』を大切にしたい体づくり運動の授業づくり』教育出版株式会社。

ii (2008) 学習指導要領解説 体育編